みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

5.広報・社会連携

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-03-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008425

5 広報・社会連携

概観

地域に根ざした広報活動

2015年11月に旧エキスポランド跡地に開業した大型複合施設エキスポシティ内の各施設と連携し、さまざまな広報活動を行った。

(1)「生きているミュージアム」ニフレルと連携協力協定を締結し、ニフレル館長を招いて開館記念トークイベント「みんぱく×ニフレル――人と生き物をつなぐ」を開催した。

(2) 無印良品ららぽーとEXPOCITYのオープニング記念グッズにデザインリソースを提供し、グッズ持参者に対して本館展示観覧料割引を実施した。また、店内のオープニングイベント「みんぱくって？ウールって？」に協力し、パネル展示を行ったほか、ウールに関する本館展示ツアーを行った。店内には継続的に本館のチラシや関連書籍を設置していただき、無印良品店舗から本館への人の流れを作った。

(3) 吹田市情報発信プラザ「Inforestすいた」及びエスニック雑貨店の「チャイハネ ららぽーとEXPOCITY」で本館のチラシを設置し、各利用者へ情報発信した。

さらに、新たに万博記念公園内の飲食店4店舗と協定を締結し、観覧料及び飲食料等の相互割引を実施し、公園内における利用者の回遊性を高め、集客を図った。

引き続き、北大阪8市3町の美術館・博物館計51館による文化祭「北大阪ミュージアムメッセ」に参加及び会場提供した。また、吹田市主催の「ぐるっとすいた」事業に協力し、吹田市の小・中学生を対象としたスタンプラリーのポイントとなった。他にもミュージアムぐるっとパス・関西2015に継続参加するなど、地域における美術館・博物館の活動における中心的役割を担い、注目度を増した千里を起点として発信する広報活動を展開した。

学校教育・社会教育活動

昨年度に続き、本館が長年培った研究成果を幅広い層に社会還元するため、博物館の外で積極的な講演活動を行った。主に社会人を対象とした生涯教育として、大阪梅田のグランフロント大阪において、連続講座「みんぱく×ナレッジキャピタル」を「世界の『民芸』」及び「世界の天然素材」をテーマにそれぞれ7回シリーズで開催した。各講座のうち1回は、本館展示ツアーとすることで、館外での催しを展示観覧につなげることを狙った。大阪阿倍野のあべのハルカス近鉄本店においては、連続講座「カレッジシアター地球探究紀行」（産経新聞主催。24回開催）に特別協力した。

また、園田学園女子大学総合生涯学習センターとの連携講座（6回開催）及び大阪府高齢者大学校の講座（28回開催）において、引き続き本館教員が講座を担当した。

その他に、大学教育の発展に向けて、千里文化財団の協力のもと、「国立民族学博物館キャンパスメンバーズ」制度を継続実施し、高等教育への活用を推進した。2015年度は、継続申し込み5件（学校法人立命館〈立命館大学・立命館高等学校・立命館宇治高等学校・立命館守山高等学校・立命館慶祥高等学校〉、大阪大学、京都文教学園〈京都文教大学・京都文教短期大学〉、千里金蘭大学、同志社大学文化情報学部文化情報学研究科）、計1,306人の学生、教職員が来館した。また、本館を大学教育に広く活用するためのマニュアル「大学生・教員のためのみんぱく活用」を本館ウェブサイトに掲載し、81件、2,530名の大学関係者が展示場を利用した。

初等・中等教育への貢献として、近隣の教育委員会と連携して、大阪北摂地域の中学校6校12名を職場体験として受け入れた。さらに、小・中学校の教諭を対象に、博物館を活用した遠足や校外学習のためのガイダンスを2回実施し、60団体170名の参加があった。

新たに、特別展「韓日食博」において、本館展示と特別展示の相互観覧による理解度の向上及び入館者数の増加を目的として、学校団体（小・中学校、高校、大学）の観覧料優待措置を実施し、本館展示観覧料で特別展を観覧できるようにした。実績として、団体観覧者数は例年の秋季特別展と比べて約6,000名増加した。

インターネットによる広報活動

ICTの進化及び国際化の進展を受けて、インターネットによるアクセシビリティを一段と向上させた。

ホームページに関しては、スマートフォンやタブレット端末によるユーザインタフェースを最適化したスマートフォン用サイトを一般公開した。また、引き続きペーパーレスのスマートフォン用観覧券を通年販売した。さらに、昨年度に作成したアラビア語、中国語（簡体字・繁体字）、フランス語、ロシア語、スペイン語、韓国語による本館紹介文に加えて、海外からの来館を想定し、観覧料やアクセス等の館内案内を掲載し、海外向けの情報発信を強化した。その他にもイベントカレンダーで1日毎のイベント情報を表示できるようにするなど利便性を高める各種改修を実施した。ホームページの利用者数は、訪問者数 640,586、ページビュー数 2,005,474であった。

メールマガジン（みんぱく e-news）に関しては、利用者アンケートの結果等を参考に内容の見直しを図りながら、毎月１回継続して発信している（配信数は58,110件）。

ソーシャルメディアに関しては、若者層を中心として、ホームページを補完する気軽で双方向型メディアとして、一昨年度の開始以来順調に利用者が増加している（Facebook いいね！数 6,238、Twitter フォロワー数 14,120、YouTube 総再生回数 9,566回）。

マスメディアによる広報活動

特別展「韓日食博」の関連イベントとして、韓国観光名誉広報大使や大阪観光大使を務め、テレビ・ラジオでも活躍するファッションモデルのアンミカ氏と毎日放送（MBS）アナウンサーの山中真氏、朝倉敏夫（本館教授・特別展実行委員長）によるトークイベント「みんぱく×MBS ラジオ presents『韓日食博』を極める！」を開催した（参加者数354名）。本イベントは、ラジオ番組及びテレビ番組で紹介された他、関連してラジオ番組の生放送に教員が出演したり、特別展や関連イベントのラジオ CM を流したりして、マスメディアの発信力を利用し、社会に向けて広範に本館の活動をアピールする格好の機会となった。

新聞に関しては、新たに京都新聞朝刊で毎週水曜日に本館研究者によるコラム「考える舌　みんぱく食の民族誌」の連載が始まった。毎日新聞の「旅・いろいろ地球人」や毎日小学生新聞の「みんぱく世界の旅」の連載も継続し、教員がそれぞれの研究内容を多様な年齢層、地域の読者向けにわかりやすく解説した。千里ニュータウン FM 放送番組「ごきげん千里837（やぁ、みんな）」も継続している。

プレスリリースを随時発信し、マスメディアに情報提供した（年間25本）。報道関係者との懇談会も年11回（うち内覧会４回。参加者数 128名）開催し、共同研究をはじめとする最新の研究成果を積極的に紹介した。2015年度は、テレビ26件、ラジオ69件、新聞722件、雑誌76件、ミニコミ誌122件、その他171件の各媒体総数1,186件で、本館の活動が紹介された。

研究成果の社会還元及び教育普及活動

研究成果の社会還元として、継続して「みんぱくゼミナール」を12回（参加者数 2,627名）、「みんぱく映画会」（みんぱくワールドシネマ含む）を12回（参加者数 3,971名）、「研究公演」を３回（参加者数 973名）、「みんぱくウィークエンド・サロン――研究者と話そう」を41回実施した（参加者数 2,093名）。

特に、展示関連では、新構築した南アジア展示・東南アジア展示を広く社会へ紹介するため「躍動する南アジア――春から秋のみんぱくフォーラム2015」及び「ゆったり東南アジア――春のみんぱくフォーラム2016」と題して、研究公演や展示場クイズ「みんぱQ」等を実施した。

機関研究関連では、「包摂と自律の人間学」のテーマに沿って、上映会「みんぱくワールドシネマ」を開催した。

これらの活動は、広報誌『月刊みんぱく』を国立民族学博物館友の会会員に配付したり、全国の研究機関、大学等に寄贈したりすること等によって、広く情報発信した。視覚障がい者向けの音訳版も並行して製作・配付した。

特に2015年度は、本館で開催された日本文化人類学会や郡山市立美術館における巡回展（「イメージの力」展。本館では2014年度に特別展として実施）でも月刊みんぱくを配付して、広報の拡大につとめた。また、教職員の希望者にバックナンバーを配付し、保管冊数の適正化を図るとともに、保管場所を一元化した。

その他の新しい広報活動

長年の懸案を解消するため、新たに下記の取り組みを実施した。

(1) 最寄り駅から本館まで徒歩で15分かかるところを、高齢者や身体が不自由な方等多くの方が快適に来館できるよう、特別展「夷酋列像」会期中に大阪モノレール「万博記念公園駅」から本館まで無料のシャトルバスを運行した。来館者のわくわく感を高めるようにデフォルメした標本資料等のイラストでバスをラッピングした。今後、利用状況を検証し、以降の運行の是非を検討する予定である。

(2) 従来、特別展等催し毎の広報印刷物はあったが、本館展示自体を広報する印刷物はなかった。エキスポシティが開業し、感性の高い若い世代にも好感を与えられるよう、新進気鋭の写真家やダンサーを起用してタブロイド判の本館展示紹介冊子を制作した。

(3) 老朽化していた本館正門前の総合掲示板をアクセスデザインの観点からリニューアルし、フロアガイドやポスター掲示スペース等を設けた。

(4) 海外からの観光客を念頭に、チラシ等の広報印刷物には原則としてすべて日英併記のロゴマークを掲載するようデザイン統一基準の改定をおこなうとともに、「館内案内」の中国語版、韓国語版を作成した。

今後の課題

全体の厳しい予算状況を反映し、広報予算は年々減少している。今後も広報事業を実施するためには、広報予算の抜本的な見直しも含めて検討しなければならない。支出を削減し、予算をかけない広報手段に注力するだけではなく、入館料等の収入の増大を図ることも課題として挙げられる。

国立民族学博物館要覧2015

・和文要覧 2015年６月発行
・英文要覧 2015年12月発行

ホームページ　http://www.minpaku.ac.jp/　（2016年３月31日現在）

本館の研究活動、博物館展示・事業活動、大学院教育の他、刊行物、文献図書資料、標本資料等あらゆる情報を、インターネットを介して世界に発信するためにホームページを作成している。

提供している主な情報は以下の通り。2015年度の訪問件数は640,586件。

・研究活動
　研究部スタッフの研究活動や業績、本館が推進する研究プロジェクトや共同研究およびシンポジウム、研究出版物などの情報。
・博物館展示・事業活動
　本館展示・企画展示・特別展示などの展示紹介、学術講演会・ゼミナール・研究公演・映画会などのイベント案内、博物館の利用案内、国立民族学博物館友の会などの情報。
・大学院教育
　総合研究大学院大学の専攻概要、授業と研究指導、在学生の研究内容等および特別共同利用研究員制度などの情報。
・データベース
　本館が所蔵する文献図書資料、標本資料、マルチメディア情報などのデータベース。

また、「みんぱく e-news」を発行し、毎月開催している「みんぱくゼミナール」、随時行われる「シンポジウム／フォーラム」「研究公演」「みんぱく映画会」「特別展」などのお知らせを、月１回電子メールで配信している。2015年度の配信数は58,110部。

報道

●報道関係者との懇談会

2015年４月16日	９名（６社）	企画展「岩に刻まれた古代美術　アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリャン」、新任紹介ほか
５月21日	９名（８社）	音楽の祭日2015 in みんぱく、連続講座「みんぱく × ナレッジキャピタル――世界の『民芸』」、企画展「岩に刻まれた古代美術――アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリャン」展示ツアーほか
６月18日	12名（９社）	特別展「韓日食博――わかちあい・おもてなしのかたち」、みんぱく映画会インド映画特集（全４回）、台湾光点計画講座「台湾客家文化を学ぶ」ほか
７月23日	８名（６社）	特別展「韓日食博――わかちあい・おもてなしのかたち」、台湾光点計画講座「日本の客家」、台湾光点計画みんぱく映画会「一八九五」、みんぱく秋の遠足・校外学習事前見学＆ガイダンスほか
８月26日	22名（11社）	特別展「韓日食博――わかちあい・おもてなしのかたち」報道・出版関係者向け内覧会
９月17日	10名（９社）	連続講座「みんぱく × ナレッジキャピタル――世界の天然素材」、国際シンポジウム「みんぱく手話言語学フェスタ2015」、みんぱくワールドシネマ「マイノリティ・ボイス＝少数派の声」、国際フォーラム「文化遺産レジー

		ムを考える――レギーナ・ベンディクス教授を迎えて」、国際シンポジウム「生物医療はアフリカに何を作り出しているのか」ほか
10月15日	10名（7社）	年末年始展示イベント「さる」、公開講演会「育児の人類学、介護の民俗学－フィールドワークによる再発見」、研究公演「時を越える南インドの踊り」、公開フォーラム「世界の博物館2015」、「アイヌ文化に触れるカムイノミ／アイヌ工芸 in みんぱく」、北大阪ミュージアムメッセほか
11月19日	9名（6社）	春のみんぱくフォーラム 2016「ゆったり東南アジア」、展示イベント「国立民族学博物館× EXPOCITY」、講演会「伝統と創意――台湾客家の工芸と音楽（台湾文化光点計画）」、研究公演「息づく仮面――バリ島の仮面舞踊劇トペンと音楽」ほか
12月17日	8名（5社）	公開シンポジウム「アンデス文明初期の神殿と権力生成」、みんぱくセミナー「通訳学☆最前線「通訳をする」ということは、どういうことなのか」、みんぱく映画会「映画で知る東南アジア」、みんぱくワールドシネマ「あの日の声を探して」、年末年始展示イベント「さる」展示ツアーほか
2016年1月21日	8名（8社）	特別展「夷酋列像――蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界」、中央・北アジア展示場リニューアル、アイヌの文化展示場リニューアル、ワークショップと講演「東南アジアの仮面と人形」、学術潮流サロン「公共人類学×公共社会学――学問と社会のつながりを考える」、国際ワークショップ「フォーラム型情報ミュージアムのシステム構築に向けて――オンライン協働環境作りのための理念と技術的側面の検討」、国際シンポジウム「無形文化遺産の継承における『オーセンティックな変更・変容』」、みんぱく映画会「波伝谷に生きる人びと」、みんぱくワールドシネマ「サンドラの週末」ほか
2月24日	24名（16社）	特別展「夷酋列像――蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界」報道・出版関係者向け内覧会

●新聞等報道件数

2015年度は、テレビ26件、ラジオ69件、新聞722件、雑誌76件、ミニコミ122件、他171件、計1,186件の報道があった。

月刊みんぱく

4月号	（第451号）	2015年4月1日発行	特集「野次と喝采」
5月号	（第452号）	2015年5月1日発行	特集「モノから生まれたものがたり」
6月号	（第453号）	2015年6月1日発行	特集「躍動する南アジア」
7月号	（第454号）	2015年7月1日発行	特集「異種混淆の世界 東南アジア」
8月号	（第455号）	2015年8月1日発行	特集「テーマパーク」
9月号	（第456号）	2015年9月1日発行	特集「韓日食博」
10月号	（第457号）	2015年10月1日発行	特集「混住」
11月号	（第458号）	2015年11月1日発行	特集「ミステリーに挑む」
12月号	（第459号）	2015年12月1日発行	特集「市に集う」
1月号	（第460号）	2016年1月1日発行	特集「さる」
2月号	（第461号）	2016年2月1日発行	特集「「夷酋列像」を読み解く」
3月号	（第462号）	2016年3月1日発行	特集「アートの境界」

みんぱくゼミナール

第443回　10世紀の西アフリカに伝わった中国製磁器――アフリカから世界史を考える

2015年４月18日

講　師　竹沢尚一郎

受講者　197名

内　容　西アフリカの10世紀の遺跡で、私たちは中国製磁器片を発掘した。海を越え、砂漠を越えて運ばれてきたこの白磁は、何を意味しているのか。アフリカの歴史を世界史の中に位置づけることで、私たちの理解はどう変わるのか。そんな問いを考えた。

第444回　先住民が守る古代遺跡――アムール河流域シカチ・アリャン村の岩画面
【企画展「岩に刻まれた古代美術――アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリャン」関連】

2015年５月16日

講　師　佐々木史郎

受講者　205名

内　容　極東ロシアのシカチ・アリャン村の岩画面は、ロシア考古学の父と称されるＡ･Ｐ･オクラドニコフが調査したことで有名になった。そこに描かれた仮面や動物は、地元の先住民族ナーナイの人びとにとっても神話の世界を物語る聖なるものとされてきたが、今は観光資源としての活用が期待されている。古代遺跡、信仰対象、そして観光資源と３つの性格をもつこの岩画面の将来を考えた。

第445回　インド刺繍布がうみだす世界【新展示（南アジア展示）関連】

2015年６月20日

講　師　上羽陽子

受講者　279名

内　容　南アジアの染織品やファッションは、現代のグローバル化にともなって、新しい「南アジア」イメージの発信・流通を媒介する重要なメディアとなっている。インド刺繍布をうみだす風土やくらし、担い手に焦点をあてながら、私たちの身近でみることのできる「エスニック雑貨」や「民族衣装」の存在についても考えた。

第446回　大陸中央の末端へ――パキスタンの山奥で言語を探す【新展示（南アジア展示）関連】

2015年７月18日

講　師　吉岡　乾

受講者　217名

内　容　ヒトの移動やくらしの中心は平地である。生活世界の「端っこ」というのは何も、陸地の縁の海に面した部分ばかりではない。山奥もまた「端っこ」になる。そんな端っこの最たるひとつでもある、“世界の屋根”と呼ばれる地域では、どういった人びとがどのような言葉を話しているのか紹介した。

第447回　オセアニアの戦争の文化

2015年８月15日

講　師　丹羽典生

受講者　206名

内　容　平和な島国としての太平洋というイメージはいまでもあるが、かつては激しい武力衝突がおこなわれ、戦争にまつわる文化が存在していた。そうしたオセアニアの戦争文化と現在の影響についてお話しした。

第448回　博物館は食をどう展示するか――特別展メーキング
【特別展「韓日食博――わかちあい・おもてなしのかたち」関連】

2015年９月19日

講　師　朝倉敏夫、大野木啓人（京都造形芸術大学教授）、佐野睦夫（大阪工業大学教授）、金炅均（韓国芸術総合学校教授）

受講者　231名

内　容　特別展「韓日食博」は、情報工学によるIT技術をもちいた体験型の展示、情報メディアによる楽しめる展示にチャレンジした。この展示ができあがるまでの過程を、一緒に展示を作りあげる研究者の仲間たちとともに語った。

第449回　言語の遺伝子をたどる――ことばの変化と人の移動
2015年10月17日
講　師　菊澤律子
受講者　205名
内　容　ことばの系統が近い、遠いとは、何を意味しているのか。人間の言語がどのように発達したのか、何をみればわかるのか。ことばの歴史を探る科学的な手法と、その結果が人間の移動や往来の歴史にどのように結びつくのか、太平洋を例にお話しした。

第450回　シルクロードの古代都市遺跡と歴史空間
2015年11月21日
講　師　寺村裕史
受講者　191名
内　容　中央アジアは「シルクロード」を通じた「人と物」の活発な交流によって人類史・文明史における重要な舞台となってきた。ウズベキスタンのサマルカンド近郊に営まれたシルクロード古代都市の考古学的な発掘調査を題材に、デジタル技術を駆使した情報考古学という視点から、その調査結果についてお話しした。

第451回　ベトナム、黒タイの台所【新展示（東南アジア展示）関連】
2015年12月19日
講　師　樫永真佐夫
受講者　181名
内　容　西北ベトナムの盆地にくらしている黒タイの高床の家には囲炉裏がある。囲炉裏こそ台所の中心と言えるだろう。しかし近年の急速な市場経済化の進展とインフラストラクチャーの整備により、各家庭の台所設備、家族生活における囲炉裏の位置づけは大きく変わりつつある。台所からくらしを見つめ直した。

第452回　東南アジアの人形芝居【新展示（東南アジア展示）関連】
2016年1月16日
講　師　福岡正太
受講者　230名
内　容　影絵人形から、あやつり人形、棒人形、そして水の中であやつる人形まで、東南アジアには多くの魅力的な人形芝居がみられる。みんぱく東南アジア展示場に展示された人形を中心に、人形をもちいた芸能の魅力を紹介した。

第453回　みんぱくにタイ寺院ができるまで【新展示（東南アジア展示）関連】
2016年2月20日
講　師　平井京之介
受講者　167名
内　容　新しくなったみんぱくの東南アジア展示場にタイの寺院ができた。外から見た壮麗さや色彩の豊かさは有名であるが、寺院の中でどんなことがおこなわれているのかまではあまり知られていない。みんぱくの展示を紹介しながら、タイの人びとにとっての仏教寺院の意味を考えてみた。

第454回　『夷酋列像』の首長たちがまとう衣装【特別展「夷酋列像――蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界」関連】
2016年3月19日
講　師　佐々木史郎
受講者　318名
内　容　クナシリ・メナシの戦いの終結に関係した12人のアイヌの首長たちを描いた『夷酋列像』。その首長たち

が身にまとう衣装は、ロシアの海軍士官の外套や蝦夷錦の朝服などアイヌの伝統的な衣服ではないといわれている。その衣装が語る当時の蝦夷地をめぐる日本、ロシア、そしてアイヌの人びとの葛藤を明らかにした。

みんぱくウィークエンド・サロン――研究者と話そう

第378回　2015年４月５日　徹底解説！トラジャの米倉

講　　師　佐藤浩司

参加人数　32人

内　　容　船のように反り返った奇妙な屋根をもつトラジャの米倉。それはいったいどのような文化のもとで生まれ、どのようにして民博の展示場に実現したのか？材料、構造、大工仕事、米倉など様々な視点から解説を行った。

第379回　2015年４月12日　台湾客家――日本、アメリカへの移住

講　　師　河合洋尚

参加人数　43人

内　　容　中国のエスニック集団である客家は、台湾に移住後、さらに日本やアメリカへと移動した。彼らは、団体を結成し、独自の文化を残すべく、多くの活動を実施している。日本とアメリカにおける台湾客家の歴史や諸活動を紹介した。

第380回　2015年４月26日　身体でみる異文化――琵琶を持たない琵琶法師のアメリカ聴き語り

講　　師　広瀬浩二郎

参加人数　47人

内　　容　2013年８月から2014年３月まで、僕はシカゴで在外研究を行った。その記録をまとめたのが拙著『身体でみる異文化――目に見えないアメリカを描く』（2015年３月）である。今回はこの新刊書の魅力を概説するとともに、アメリカ滞在時の「聴く＝受信」「語る＝発信」のエピソードを紹介した。

第381回　2015年５月３日　くらしに息づく豊かな宗教伝統：南アジアの新展示から

講　　師　三尾 稔

参加人数　65人

内　　容　経済発展が続く南アジアでは、生活環境が目まぐるしく変わるなかでも多様な宗教伝統が日常生活に生き生きと根づいている。３月に展示内容を一新してオープンした南アジア展示場のみどころの解説とともに、豊かな宗教文化のありさまを紹介した。

第382回　2015年５月10日　染織の伝統と現代――新しくなった南アジア展示場

講　　師　上羽陽子

参加人数　66人

内　　容　南アジアの刺繍や染め、織りなどの染織文化は、多様な自然環境からうまれる繊維素材や染材などに支えられてきた。現代のグローバル化においてこれらの染織文化はどのように変容しているのか。新しくなった展示場で染織文化の伝統と現代について紹介した。

第383回　2015年５月17日　南アジアの結婚式と音楽

講　　師　寺田吉孝

参加人数　47人

内　　容　南アジアのヒンドゥー教徒の結婚式には音楽が欠かせない。様々な場面で音楽が演奏され、その内容は特定の式次第と結びついている。では、なぜ音楽が演奏されるのか。南インドとネパールを例として、結婚式における音楽の意味を考えた。

第384回　2015年５月24日　シカチ・アリャンの岩面画とナナイの神話
講　　師　佐々木史郎
参加人数　62人
内　　容　極東ロシアのハバロフスクの近郊のシカチ・アリャンという村には古代の人々が線刻画を彫り込んだ岩が近くの河原に数多く見られる。ここでは現在村に暮らすナナイという先住民族の人々がこの岩画にどのような物語をつけて守り続けてきたのかについて解説した。

第385回　2015年５月31日　なぜ「イスラムの語源は平和」という誤解が流布するのか？――マスコミと御用学者の功罪
講　　師　西尾哲夫
参加人数　51人
内　　容　私達のイスラム理解は常に現在の中東情勢に反応している。テロが蔓延する世界ではなく、人びとの等身大の姿を紹介しようとするあまり、偏った言説や意図的な曲解を生み出している。どうすればバランスのとれた他者理解が可能になるのかを考えた。

第386回　2015年６月７日　中国チワン族の棚田観光の現状
講　　師　塚田誠之
参加人数　36人
内　　容　中国では経済発展にともない各地で観光化が進展している。本報告では、広西の龍勝県龍脊地方における棚田を活用した観光化の歴史と現状、観光化にともなう地元のチワン族の人々の動向について、問題点をも踏まえながら、最新の調査にもとづき紹介した。

第387回　2015年６月14日　次週開催！「音楽の祭日」を10倍楽しむ法
講　　師　出口正之
参加人数　18人
内　　容　みんぱくでは毎年「音楽の祭日」を開催して、多くの方々に楽しんでいただいている。「音楽の祭日」とはプロ・アマを問わない音楽家によるライブ・コンサートで、すべて入場無料で音楽を楽しむ日である。2015年６月21日に開催予定の「音楽の祭日」を楽しむすべを紹介した。

第388回　2015年６月28日　伝承される伝統中国の人生儀礼
講　　師　韓敏
参加人数　25人
内　　容　漢族は中国の農耕文明を担ってきた最大の民族集団である。人口の多い漢族の習慣は地域によって異なるが、人生儀礼とその裏をつけるものの考え方は共通しており、いまでも伝承されている。展示品をみながら、豊かな人生儀礼のありさまを紹介した。

第389回　2015年７月５日　シカチ・アリャンの岩面画の成立年代と日本の縄文時代
講　　師　佐々木史郎
参加人数　75人
内　　容　シカチ・アリャンの岩面画遺跡の近くにあるガーシャ遺跡と呼ばれる遺跡は、最も古い時代から土器片が出土し、年代測定で12000年～14000年前という結果が出ている。その時代の文化「オシポフカ文化」と日本の縄文文化との関係を探った。

第390回　2015年７月12日　インドの新しいファッション
講　　師　杉本良男
参加人数　45人
内　　容　南アジア展示場の新構築に伴い、インドの新しいファッションも展示している。21世紀に入って、有名デザイナーの活動が世界的にも定着し、中間層のファッションにも取り入れられる一方で、手織りのサリー産業が危機に陥っている現状について解説した。

第391回　2015年７月19日　インドのお手伝いさん――女性家事労働を考える

講　　師　松尾瑞穂

参加人数　60人

内　　容　インドの一般家庭に家事使用人は欠かすことのできない存在である。そこには、貧富の差だけでなく、カーストによる浄・不浄の観念も反映されている。女性の社会進出や電化製品の普及は、家事労働にどのような変化をもたらすのか考えた。

第392回　2015年７月26日　言語から歴史を読み解く――南アジアを例にして

講　　師　吉岡 乾

参加人数　62人

内　　容　遺跡、古文書、口伝など、歴史を解明する手立ては様々あるが、言語も一つの手掛かりとなる。それは言語が、長い時間の中で少しずつ変化しながらも、親から子へと継承されて来ているものだからである。南アジアの言語地図などを例に、歴史を読み解いた。

第393回　2015年８月９日　温故知新――ネパールの1982年と2013年の映像から

講　　師　南 真木人

参加人数　47人

内　　容　みんぱくが過去に映像取材をしたネパールの仮面作り、タイコ作り、金物商、穀物商を訪ね、30年後の景観、生業、暮らしの変化を再び映像に収めた。新旧の映像で構成されるビデオテーク新番組「カトマンドゥ盆地の30年」をご覧いただき、ネパールの変化と現在を考えた。

第394回　2015年８月16日　南太平洋のハカ（民族舞踏）の広がり

講　　師　丹羽典生

参加人数　54人

内　　容　ニュージーランドの先住民のあいだには、ハカという戦争の前に敵を威嚇するために行われる舞踏がある。現在でもラグビーの試合前のパフォーマンスとして広く知られている。本サロンでは、ハカがオセアニア各地のパフォーマンスとして広がっているさまについて紹介した。

第395回　2015年８月23日　みんぱくで世界一周！――世界のいきものたちに会いに行こう

講　　師　池谷和信

参加人数　42人

内　　容　みんぱくの展示場は、ぐるっと回ると世界一周ができるようにつくられている。今回は、生き物と人とのかかわりあいをテーマに展示場をまわった。オセアニアやアマゾンの鳥の羽根、アフリカのダチョウの卵、西アジアのラクダなど、展示場をフィールドとみたてて、そこから見つけた新たな事実を紹介した。

第396回　2015年８月30日　日本の焼肉文化考

講　　師　朝倉敏夫

参加人数　88人

内　　容　日本の焼肉は、朝鮮半島をルーツとするものの、日本社会において育てられてきた。ことに外食における「無煙ロースター」と家庭食における「焼肉のタレ」は日本が生んだ発明品である。韓国の焼肉との比較を通して、日本の焼肉文化を考えた。

第397回　2015年９月20日　デジタル技術でモノ（文化資源）を測る

講　　師　寺村裕史

参加人数　27人

内　　容　デジタル技術の進歩によって、リアルな「モノ（文化資源）」をデジタル化するさまざまな方法が開発されてきている。なかでも３次元レーザースキャナを使った3D計測は、考古学や文化財科学の分野でも、よく利用されるようになってきた。本サロンでは、ウズベキスタンや日本の遺跡を中心に、文化資源の3D計測の調査事例を紹介した。

第398回　2015年９月27日　アフリカ史の謎を解く
講　　師　竹沢尚一郎
参加人数　56人
内　　容　西アフリカ、ナイジェリア南部にイグボ・ウクウ遺跡がある。700点以上の銅製品と、15万個以上のガラスビーズが出土したことで名高い遺跡である。しかし、それらの作品を誰が、どこで作ったかはいまだに謎に包まれている。発掘調査を踏まえて、１つ１つ解き明かした。

第399回　2015年10月４日　中央アジアの30年――展示リニューアルへ向けて
講　　師　藤本透子
参加人数　38人
内　　容　2015年度末、中央アジア展示は約30年ぶりにリニューアルを行う。ソ連時代から中央アジア諸国の独立を経て、現地の暮らしは大きく変化した。展示場で当時の民家や花嫁衣裳をじっくりご覧いただきながら、暮らしの変化と伝統の再評価について考えた。

第400回　2015年10月11日　カナダ先住民のアート――イヌイットと北西海岸先住民を中心に
講　　師　岸上伸啓
参加人数　26人
内　　容　カナダのイヌイットや北西海岸先住民が制作した彫刻品や版画は、先住民アートとして世界中に広まっている。彼らのアート制作の歴史、作品のモチーフや特徴について紹介し、先住民にとってのアート制作の意義について考えた。

第401回　2015年10月18日　作られたアフリカ的なもの
講　　師　三島禎子
参加人数　37人
内　　容　人びとが誇るアフリカ的なもののなかには、外から運び込まれて出来上がったものがある。とくに植民地時代には宗主国の経済的な戦略のもとに、さまざまな習慣やものがアフリカに導入された。それらの経緯や、そこにある矛盾について解説した。

第402回　2015年10月25日　博物館の中の文化遺産、博物館の外の文化遺産
講　　師　飯田 卓
参加人数　13人
内　　容　民族誌博物館は、くらしに息づく有形の文化遺産を保存し展示する役割を担っている。いっぽう、伝統的建造物群保存地区や文化的景観、無形文化遺産など、くらしの場で保存される遺産も少なくない。両者をふまえて、くらしに関わる文化遺産の問題を考えた。

第403回　2015年11月１日　オセアニアの食文化――パンの実とタロイモの料理
講　　師　須藤健一
参加人数　62人
内　　容　オセアニアの主食は、タロやヤムなどの根栽類とパンの実やバナナなどである。焼き、煮る、蒸すなどが基本的な料理法だが、搗いて餅状にしてココヤシミルクをかけるのがごちそうである。パンの実の内部はでんぷん質で、その発酵食品は航海など長旅の携帯食として欠かせない。サンゴ礁の人びとの食文化を探究した。

第404回　2015年11月８日　石毛さんに聞く：日韓の食文化研究
講　　師　朝倉敏夫
参加人数　107人
内　　容　石毛さんは韓国の食文化研究者とも親しくつきあって来られた。李盛雨、黄慧性、尹瑞石、金尚寶、韓福眞はじめ、韓国の食文化研究者との交流をふりかえり、日韓の食文化研究の回顧と展望をおこなった。

第405回　2015年11月29日　聖者崇敬からみたシリア、レバノン、ヨルダン、パレスチナ
講　　師　菅瀬晶子
参加人数　65人
内　　容　中東のムスリムとキリスト教徒、ユダヤ教徒は、古来より共通する聖者の祝祭を共有することで、共存に役立ててきた。しかし今日、紛争などの理由により、その共存は危機に瀕している。聖者崇敬の視点から、共存の歴史と今後の展望を解説した。

第406回　2015年12月６日　東南アジアの１日
講　　師　信田敏宏
参加人数　23人
内　　容　新しくなった東南アジア展示では、東南アジア独特の魅力をより感じ取っていただけるよう、朝、昼、夕方、夜という４つの空間に展示品を盛り込んだ。１日という短い時間のなかに凝縮した東南アジアの魅力や人びとの暮らしぶり、展示の見どころについて解説した。

第407回　2015年12月13日　ベトナム、ターイの台所
講　　師　樫永真佐夫
参加人数　43人
内　　容　東南アジア展示場に、ベトナムのターイの高床式住居内にある台所が再現展示された。囲炉裏がある台所は、家族の生活、儀礼や信仰とどのような関わりを持っているのか。再現展示のための資料収集の裏話なども含めて解説した。

第408回　2015年12月20日　タイ・ラオス仏教寺院の歩き方
講　　師　平井京之介
参加人数　43人
内　　容　３月に新しくなった東南アジア展示場に、タイ・ラオスの仏教寺院を再現するコーナーができた。展示ができるまでの紹介と、仏像や仏具の見方などの解説を行い、修行僧にとって、村人にとって、寺院がどんな意味をもつかを考えた。

第409回　2016年１月10日　バリ島の仮面作りと職人――命をふきこむ技と祈り
講　　師　吉田ゆか子
参加人数　48人
内　　容　バリ島の仮面芸能では、仮面が生き生きとした表情をみせることで観客たちを魅了している。こうした仮面はどのように作られるのか。今回は、仮面職人たちの思いや、工夫、祈りに注目しながら、彼らが仮面に命を吹き込むプロセスを考えた。

第410回　2016年１月17日　画像データベースで見る・学ぶ「近代日本の身装文化」
講　　師　丸川雄三
参加人数　18人
内　　容　近代日本における身体と装い（身装）を研究するための学術データベース「近代日本の身装文化」を紹介した。これは、当時の人々の様子が活写された新聞挿絵や絵画、写真などの画像資料を、解説やエッセイとともに学び、楽しむことができるウェブサイトである。

第411回　2016年１月24日　東南アジアの人形芝居――撮影裏話
講　　師　福岡正太
参加人数　39人
内　　容　音楽展示や東南アジア展示の新構築を目指して、東南アジア各地の人形芝居の映像取材や資料収集を重ねてきた。人形師や音楽家、計画に協力してくださった方々など、人形芝居に情熱と愛情を注ぐ多くの人々との出会いや現地でのエピソードなどを紹介した。

第412回　2016年１月31日　チョコレート博物館
講　　師　鈴木 紀
参加人数　63人
内　　容　フランス・ドイツ・ベルギー等のヨーロッパの国々や、コスタリカ・グアテマラ等の中央アメリカの国々にあるチョコレート博物館を紹介した。そして、これらの博物館の展示をもとに、チョコレートの食文化やカカオの持続可能な生産について解説した。

第413回　2016年２月７日　一神教の宗教、多神教の宗教
講　　師　新免光比呂
参加人数　77人
内　　容　世界にはさまざまな宗教があり、それぞれ独自の教えと儀礼と組織をもっている。これらを理解することは難しいが、宗教は文化形成の大きな力なので、多様な文化を理解するためには宗教を理解することが必要となる。それぞれの宗教を比較しながら解説した。

第414回　2016年２月14日　窓から「見ることができる」収蔵庫
講　　師　園田直子
参加人数　46人
内　　容　みんぱくには34万点以上の資料があり、展示、貸出、閲覧・調査などに活用されている。資料の活用をささえるのは、適切な保管と保存である。ここでは、現在進めている大型民族資料収蔵庫の改修と再配架について、収蔵庫の窓ごしに内部の様子を見ながら説明した。

第415回　2016年２月21日　宗教の始原をさぐる――南部アフリカ聖霊教会の現在（いま）
講　　師　吉田憲司
参加人数　63人
内　　容　1990年を境に、ザンビア東部州一帯で、人びとのキリスト教への入信と聖霊（Holy Spirit）の憑依が爆発的に増加した。私は、過去二十数年間、南部アフリカ全体を踏査し、その淵源を探ってきた。奇しくも、その旅は、宗教の始原を追跡する旅となった。南部アフリカにおけるキリスト教聖霊教会の現在（いま）を報告した。

第416回　2016年２月28日　人魚のミイラ――驚異と怪異の接点
講　　師　山中由里子
参加人数　85人
内　　容　民間信仰、見世物文化、博物学、経済史など様々な観点から「人魚のミイラ」について考察し、そこに見えてくる近世の日本と世界のつながりについて解説した。

第417回　2016年３月６日　夷酋列像をめぐる、人、物、世界
講　　師　日髙真吾
参加人数　122人
内　　容　夷酋列像は、蝦夷錦と称される中国から渡来した絹織物や、西洋の外套や靴など北東アジアの交流によってもたらされた品々を身につけて立ち並ぶ12人のアイヌの有力者たちが描かれている。今回のウイークエンドサロンでは夷酋列像に描かれた器物を中心に紹介した。

第418回　2016年３月27日　ソースコミュニティと共に行う博物館資料の熟覧調査
講　　師　伊藤敦規
参加人数　27人
内　　容　2014年６月から開始した民博のフォーラム型情報ミュージアムプロジェクトについて、特にソースコミュニティの人びとを民博に招聘して実施している資料熟覧調査に注目しながら、内容と意義を分かりやすく紹介した。

研究公演

「ネパールのネワール仏教舞踊チャルヤー」

2015年４月19日

解　説　南 真木人、立川武蔵（名誉教授）

出　演　プラジョワール・ラトナ・ヴァジュラチャルヤ、岡本有子

参加者　120名

内　容　ネパールのカトマンドゥ盆地にくらしてきたネワール人。その仏教僧侶カーストであるヴァジュラチャルヤは、修行のひとつとしてチャルヤーという舞踊を伝えてきた。動くヨーガともいわれるチャルヤーは、自己と宇宙を体感し、仏に近づく手段であるが、見る者にはまるで動く仏像のようである。解説をまじえ、チャルヤーの奥義を紹介した。

「時を超える南インドの踊り」

2015年11月22日

解　説　寺田吉孝

出　演　ナルタキ・ナタラージ ほか５名

参加者　434名

内　容　バラタナーティヤムは、南インドのヒンドゥー寺院でおこなわれた奉納舞踊を起源とし、1930年代に舞台芸術として再生した舞踊ジャンルである。現在、インドを代表する古典舞踊ジャンルの一つとして、インド国内はもとより世界各地の南アジア系移民コミュニティでも盛んに実践されている。本公演では、カラクシェトラ様式とは異なる舞踊伝統を継承してきた舞踊家の一人、ナルタキ・ナタラージの舞踊を通して、インド舞踊文化の重層性や多様性を紹介した。

「息づく仮面――バリ島の仮面舞踊劇トペンと音楽」

2015年12月６日

解　説　福岡正太、吉田ゆか子

出　演　イ・クトゥット・コディ、イ・マデ・マハルディカ、ギータ・クンチャナ＋α、佐味千珠子、中野愛子ほか

参加者　419名

内　容　バリ島から、第一線で活躍中の舞踊家２名を迎え、仮面舞踊劇トペンを上演した。青銅製の打楽器を中心とする合奏ガムランを伴奏に、仮面を次々とつけかえて、いろいろな役を演じ分けていく様子をお楽しみいただいた。ガムラン演奏と歓迎の舞踊を担当したのは、西日本を中心に活躍する日本人のグループである。

みんぱく映画会

2015年７月20日

インド映画特集【新展示（南アジア展示）関連】

「ファンドリー」

司　会　杉本良男

解　説　松尾瑞穂

参加者　443名

内　容　舞台は、西インド・マハーラーシュトラ州の農村。村はずれに住む、不可触民の少年ジャビャーの家族は、差別され、貧しい暮らしを余儀なくされている。高カーストの少女シャルーに恋心を抱いているが、話しかけられず、ただ見ているだけ。ジャビャーは、幸せをもたらすといわれる黒い雀を見つけようと、友人と一緒に探し回るが…。少年の淡い恋心をベースに、いまだに根強く残るカースト差別という社会問題に迫る本作は、国際映画祭で数々の賞を受賞するとともに、インド映画界の名誉と言われるナショナルフィルムアワードの最優秀監督デビュー賞と最優秀子ども俳優賞を受賞した。

2015年７月25日
インド映画特集【新展示（南アジア展示）関連】
「カーンチワラム　サリーを織る人」
司　会　杉本良男
解　説　杉本星子（京都文教大学教授）
参加者　327名
内　容　舞台は、シルク・サリー生産で有名な南インド・タミルナードゥ州カーンチープラム（カーンチワラム）である。インド独立直後の1948年、手織りシルク・サリー職人が、当時の悲惨な労働環境のもとで、新婚の妻にさえ高価なシルク・サリーを贈ってあげられないほどの貧困にあえぎ、権力にはげしく抵抗しながら生活を改善しようと奔走するすがたをリアルに、美しい画像で描いた佳品。2008年度ナショナルフィルムアワード最優秀作品賞に輝いたほか、海外でもいくつかの賞を受賞している。残念なことにこの映画が制作されたころから、手織りシルク・サリーは急速にその勢いを失い始めている。

2015年８月２日
インド映画特集【新展示（南アジア展示）関連】
「Mr. & Mrs. アイヤル」
司会・解説　杉本良男
参加者　275名
内　容　タミル・ブラーマンの若い母親ミーナクシとベンガル・ムスリムの写真家の男性ラージャがたまたま乗り合わせていたコルカタ行きのバスを、ヒンドゥー過激派が襲い、ムスリムの乗客をあぶり出そうとしたとき、二人がとっさの機転でタミル・ブラーマンのアイヤル夫妻（Mr. & Mrs. Iyer）を名乗り、その窮地を脱するまでの心の交流を中心に、宗教や地域などの違いによって分断されるインド社会の複雑な現状を鋭く批判している。西ベンガル州コルカタ生まれで、女優、監督として多くの問題作を送り出してきたアパルナ・センの監督作品で、複雑な状況を反映して、英語、ベンガル語、タミル語が使用されている。

2015年８月８日
インド映画特集【新展示（南アジア展示）関連】
「DDLJ　勇者は花嫁を奪う」
司　会　杉本良男
解　説　三尾 稔
参加者　448名
内　容　インド系イギリス移民を主人公にヨーロッパとインドで繰り広げられる青春恋愛ドラマ。ヨーロッパ卒業旅行中にヒロイン、シムランと恋に落ちたラージ。しかし、シムランには生後直後に父が決めた許婚がいた。許婚との結婚のため里帰りしてしまったシムランをラージは追い掛け、一世一代の勝負に出る。コメディー・タッチの筋の中に、伝統的な家族の価値と個人の感情との葛藤というインドの古くて新しい問題を投げかけてくるこの作品は本国だけでなくインド移民の間でも空前の大ヒットとなり、インド映画の歴史を塗り替える金字塔となった。

2015年９月23日
台湾映画鑑賞会――映画から台湾を知る
「一八九五」
司　会　野林厚志
解　説　河合洋尚
参加者　620名
内　容　近年、台湾では、多文化主義運動の影響を受け、客家や原住民を意識した映画が増加している。本映画は、初めて客家語を主体として、日本が台湾を植民地とした1895年の、台湾住民が日本軍に抵抗した当時の状況を描き出したものである。抗日戦線のなかでの客家を中心に、閩南人、原住民との関係をも描き、映画を通して台湾の「多民族的状況」を見ることができる。また、当時日本軍とともに軍医として台湾に滞在していた若き日の文豪・森鴎外の視点で、状況が語られていくのも注目するところである。

本邦初公開となる台湾映画「一八九五」を解説付きでご覧いただき、台湾への理解を深めていただいた。

2015年10月12日
みんぱくワールドシネマ　映像に描かれる＜包摂と自律＞
「長江哀歌」
司　会　鈴木 紀
解　説　河合洋尚
参加者　468名
内　容　本館では＜包摂と自律＞のテーマにあわせて、研究者による解説付きの上映会「みんぱくワールドシネマ」を実施している。第７期は＜マイノリティ・ボイス＝少数派の声＞をキーワードに映画上映を展開した。今回は中国映画「長江哀歌」を上映し、三峡ダム建設で沈みゆく古都を舞台に、国家の発展や変化によって、土地や家、伝統文化が失われていく現代に生きる市井の人びとの姿を通して、社会の在り方を参加者とともに考えた。

2015年12月12日
みんぱくワールドシネマ　映像に描かれる＜包摂と自律＞
「イロイロ　ぬくもりの記憶」
司　会　菅瀬晶子
解　説　永田貴聖
参加者　220名
内　容　本館では＜包摂と自律＞のテーマにあわせて、研究者による解説付きの上映会「みんぱくワールドシネマ」を実施している。第７期は＜マイノリティ・ボイス＝少数派の声＞をキーワードに映画上映を展開した。今回はシンガポール映画「イロイロ　ぬくもりの記憶」を上映し、1997年、アジア経済危機で不況の追い風が吹くシンガポールを背景に、ある少年とフィリピンから来たメイドとの交流の物語を通して、異国で働く出稼ぎ労働者とその状況について参加者とともに理解を深めた。

2016年１月10日
映画で知る東南アジア【新展示（東南アジア展示）関連】
「虹の兵士たち」
司　会　福岡正太
解　説　福岡まどか（大阪大学准教授・国立民族学博物館共同研究員）
参加者　216名
内　容　「貧しい子どもにも学ぶ権利がある。」1974年、スマトラ島の東に浮かぶブリトゥン島で、廃校寸前のイスラム小学校に10人の生徒が入学した。校舎はオンボロで、立派な隣の小学校とは比べ物にならない。しかし、新任の女性教師に「虹の兵士たち」と名付けられた子どもたちは、豊かな個性を発揮し、成長していく。急速な経済発展の陰で現代の東南アジア社会がかかえる課題とその中で生きる人びとについて、映画を通じて理解を深めた。

2016年１月24日
映画で知る東南アジア【新展示（東南アジア展示）関連】
「消えた画 クメール・ルージュの真実」
司　会　福岡正太
解　説　サムアン・サム（国立民族学博物館外国人研究員）
参加者　205名
内　容　1990年、リティ・パン監督は、朽ちかけた大量の映画フィルムを発見した。そこには、ポル・ポト率いるクメール・ルージュの宣伝映画が多く含まれていた。映画の中のポル・ポトの笑顔の裏で、虐殺や飢えの犠牲となった人びと。歴史の大波に飲み込まれながらも生き残った監督は、犠牲者が葬られた地の土と水で人形を作り、映像には残されていない彼ら１人１人の存在や体験を表現し、伝えようと試みた。急速な経済発展の陰で現代の東南アジア社会がかかえる課題とその中で生きる人びとについて、映画を通じて理解を深めた。

2016年１月30日
みんぱくワールドシネマ　映像に描かれる＜包摂と自律＞
「あの日の声を探して」
司　会　鈴木 紀
解　説　中村唯史（京都大学大学院教授）
参加者　266名
内　容　本館では＜包摂と自律＞のテーマにあわせて、研究者による解説付きの上映会「みんぱくワールドシネマ」を実施している。第７期は＜マイノリティ・ボイス＝少数派の声＞をキーワードに映画上映を展開した。今回はフランス＝ジョージア映画「あの日の声を探して」を上映し、1999年、ロシアに侵攻されたチェチェンを舞台に、両親を殺害され声を失った少年、自分の無力さに悩むEU人権委員会の女性職員、強制的に徴兵されたロシア青年の３人の姿に描かれた、戦況の中を生き抜くそれぞれ立場の違う人間の苦悩について、参加者とともに考えた。

2016年２月６日
みんぱく映画会
「波伝谷に生きる人びと」
司　会　日髙真吾
解　説　政岡伸洋（東北学院大学教授）、我妻和樹（監督）
参加者　213名
内　容　本館では、東日本大震災以降、被災地の生活文化への支援を継続して実施している。現在、震災の記憶の風化や、震災以前の生活の記憶が失われつつあることへの課題が浮かび上がっている。そこで今回、震災以前から宮城県南三陸町波伝谷の生活を撮り続けてきた我妻和樹監督作品の「波伝谷に生きる人びと」を上映し、我妻監督と波伝谷の方々をお招きし、震災以前の生活や震災時の記憶がなぜ大事なのか、参加者とともに被災地の将来について考えた。

2016年３月20日
みんぱくワールドシネマ　映像に描かれる＜包摂と自律＞
「サンドラの週末」
司　会　松尾瑞穂
解　説　宮下隆二（作家）、鈴木 紀
参加者　270名
内　容　本館では＜包摂と自律＞のテーマにあわせて、研究者による解説付きの上映会「みんぱくワールドシネマ」を実施している。第７期は＜マイノリティ・ボイス＝少数派の声＞をキーワードに映画上映を展開した。今回はベルギー・フランス・イタリア合作「サンドラの週末」を上映し、ヨーロッパの小都市の小さな会社から突然の解雇を告げられた女性が、最後の猶予に賭けて奔走する週末を通して、様々な立場に立つ労働者と人間同士の信頼について考えた。

博学連携

●学習キット「みんぱっく」
学校機関や各種社会教育施設を対象に、本館の研究成果をわかりやすく伝えることを目的として学習キット「みんぱっく」の貸し出しを実施している。「みんぱっく」は世界の国や地域の衣装や楽器、日常生活で使う道具や子どもたちの学用品などをスーツケースにパックしたもので、2016年３月現在で14種類23パックを用意している。

名称	個数	2015年度貸し出し回数
極北を生きる	2	15
アンデスの玉手箱	2	25
ジャワ島の装い	1	10
イスラム教とアラブ世界のくらし	1	14
ブータンの学校生活	1	6

ソウルスタイル	2	25
ソウルのこども時間	2	16
インドのサリーとクルター	2	12
ブリコラージュ	3	2
アラビアンナイトの世界	2	9
アイヌ文化にであう	1	14
アイヌ文化にであう２	1	12
モンゴル	2	35
あるく、ウメサオタダオ展	1	6

●みんぱく春と秋の遠足・校外学習　事前見学＆ガイダンス

春のガイダンス　2015年４月３日（金）、６日（月）

秋のガイダンス　2015年８月21日（金）、24日（月）

本館を利用する学校団体の引率教師を対象としたガイダンスを春と秋に実施し、春には32団体91名、秋には28団体79名、計60団体170名の学校関係者が参加した。

当ガイダンスでは、遠足や校外学習など、博物館見学の準備や事前・事後の学習に役立つツールを紹介したほか、見学に関するさまざまな相談も受けた。

●職場体験

2015年10月28日（水）～11月19日（木）

学校教育及び社会教育における体験活動の促進を図り、中学校等の生徒の社会性を育む観点から、中学生に「職場体験学習」の機会を提供しており、2015年度は６校12名の参加があった。

その他の事業

●「ミュージアムぐるっとパス・関西2015」

関西地区の美術館・博物館の宣伝・広報と新規需要の掘り起こし、関西文化の振興等を目的として、実行委員会世話人会の一員として参画した。

●「音楽の祭日2015 in みんぱく」

実施日：2015年６月21日

フランスで始まった夏至の日を音楽で祝う「音楽の祭典」が、2002年から日本でも「音楽の祭日」として開催されるようになり、本館もその趣旨に賛同し音楽を愛する一般市民に広く本館を解放して開催することとなった。当日は25のグループや個人の演奏があった。

●展示場クイズ「みんぱＱ」

クイズ「みんぱＱ」は、展示を観覧しながら知識や興味を広げてもらおうと、クイズ形式で本館展示を楽しんでもらう企画である。

本館展示の新構築に合わせ、2015年７月23日（木）～８月25日（火）に「みんぱＱ　南アジア編」、2015年12月10日（木）～2016年１月12日（火）に「みんぱＱ　東南アジア編」を実施した。

●「みんぱく×MBSラジオ presents『韓日食博』を極める！」

韓国観光名誉広報大使や大阪観光大使を務め、テレビ・ラジオでも活躍するファッションモデルのアンミカ氏と毎日放送（MBS）アナウンサーの山中真氏、朝倉敏夫（本館教授・特別展実行委員長）による特別展「韓日食博」のトークイベントを2015年９月13日（日）に実施した（参加者数354名）。

●カムイノミ

実施日：2015年11月12日

カムイノミというアイヌ語は「神への祈り」という意味であり、その実施は本館が所蔵するアイヌ標本資料の安

全な保管と後世への確実な伝承を目的としている。従来は萱野 茂氏（故人、萱野茂二風谷アイヌ資料館前館長）によって非公開でおこなわれていた。2007年度からは、社団法人北海道ウタリ協会（現 公益社団法人北海道アイヌ協会）の会員がカムイノミと併せてアイヌ古式舞踊の演舞を公開により実施し、2015年度は阿寒アイヌ協会の協力を受けた。

●北大阪ミュージアムメッセ

2015年11月14日（土）、11月15日（日）に、北大阪の８市３町の美術館・博物館の文化祭「北大阪ミュージアムメッセ」を本館にて開催し、展示やワークショップ、楽器の演奏等がおこなわれた。

●連続講座「みんぱく×ナレッジキャピタル」

一般社団法人ナレッジキャピタルとの間に取り交わした連携協力協定に基づき、グランフロント大阪において連続講座「みんぱく×ナレッジキャピタル」を、上半期は「世界の民芸」をテーマに、下半期は「世界の天然素材」をテーマに合計14回（うち２回は展示ツアー）開講した。

●北海道アイヌ協会技術者研修

1990年より本館の所蔵する資料の研究・活用による学術研究の進展とアイヌ民族の文化の振興を目的として、社団法人北海道アイヌ協会が派遣した伝統工芸技術者を外来研究員として受け入れている。2015年度の受入実績は以下のとおりである。

受入期間：2016年２月16日～２月19日

受入人数：２名

ボランティア活動

「みんぱくミュージアムパートナーズ（MMP）」は、本館の博物館活動の企画や運営をサポートする自律的な組織として2004年９月に発足した団体である。

来館者からの要望に応じておこなう視覚障がい者に対する展示場案内や、学校団体に対する教育プログラム「わくわく体験 in みんぱく」、一般来館者向けのものづくりワークショップなど、多岐に広がる活動を本館との協働で進めている。また、館外でおこなわれるワークショップフェスやボランティア交流会にも積極的に参加し、他の博物館や施設との交流を広めている。

一般財団法人千里文化財団の事業

●国立民族学博物館友の会講演会（協力：国立民族学博物館）

◎大阪：国立民族学博物館　第５セミナー室等（毎月第１土曜日開催）

第441回　「つくられる地域の食――スローフード発祥の地、イタリアから考える」【世界の食文化を学ぶ①】

2015年４月４日　　講師　宇田川妙子　　参加人数　44名

均質化する食に疑問を投じ、食の在り方を見直す動きが高まるなか、現代社会の様相が複雑に関係するローカルな食の形成についてイタリアを例に考えた。

第442回　「躍動する南アジアの背景にせまる」【新南アジア展示関連】

2015年５月２日　　講師　三尾 稔　　参加人数　46名

政治・経済、そして文化的にも「躍動」の時代を迎えている南アジア。その基盤にある「多様性の共存」という南アジアの特性を、宗教、文化、生活様式等から考えた。

第443回　「聖なる遺跡は物語る――アムール河の少数民族ナナイの神話をさぐる」
【企画展「岩に刻まれた古代美術」関連】

2015年６月６日　　講師　佐々木史郎　　参加人数　51名

企画展の開催にあわせ、少数民族ナナイの聖地シカチ・アリャンの岩面画をたよりに、アムール河流域に伝わる神話世界について考えた。

第444回 「ヨーガの隆盛をさぐる――現代インドにおける『伝統』の再評価」【新南アジア展示関連】
2015年７月４日　　講師　竹村嘉晃（現代インド地域研究国立民族学博物館拠点拠点研究員）　参加人数　48名
インドを発祥とし、近年あらたなエクセサイズとして注目されているヨーガをとおして、変化の著しい現代インドの文化・社会的な動態について考えた。

第445回 「インドを彩る日本のタイル――インド近代化遺産のもうひとつの物語」【新南アジア展示関連】
2015年８月１日　　講師　豊山亜希（現代インド地域研究国立民族学博物館拠点拠点研究員）　参加人数　22名
イギリス植民地期に建てられた「印洋」折衷様式の建築に注目し、インドにおける文化遺産の在り方と、近代における日本とインドの交流の足跡をたどった。

第446回 「日韓の汁文化と発酵食品」【特別展「韓日食博」関連／世界の食文化を学ぶ②】
2015年９月５日　　講師　福留奈美（お茶の水女子大学専門食育士）　参加人数　46名
両国の汁物、漬物、発酵調味料をとおして、食材やその組み合わせ、盛り付け方や食べ方など、日韓食文化の類似点と相違点について考えた。

第447回 「『医食同源』の思想――中国の食と漢方」【世界の食文化を学ぶ③】
2015年10月３日　　講師　池谷幸信（立命館大学特任教授）　参加人数　45名
古代中国医学は「食べ物が体を養う最大の薬」であるとし、漢方薬を構成する生薬の多くが植物に由来する。中国の医食同源の思想から生まれた漢方薬について考えた。

第448回 「移住がつくる客家の食」【世界の食文化を学ぶ④】
2015年11月７日　　講師　河合洋尚　　参加人数　37名
広大な面積をほこる中国では食文化も一様ではない。漢族の一集団・客家に着目し、食のグローバル化とローカル化について考えた。

第449回 「カナダの魚食文化――日本人移民との関わりから」【世界の食文化を学ぶ⑤】
2015年12月５日　　講師　河原典史（立命館大学教授）　参加人数　35名
カナダの魚食文化、とくに現地でアレンジされたBCロールとよばれる寿司を切り口に、カナダに移り住んだ日本人移民の歴史について考えた。

第450回 「イスラーム化と向き合う先住民――新東南アジア展示から読みとく」【新東南アジア展示関連】
2016年１月９日　　講師　信田敏宏　　参加人数　43名
1980年以降、本格化されたマレーシアのイスラーム化政策が、精霊信仰・アニミズムを保持する先住民オラン・アスリ社会に何をもたらしたのかを考えた。

第451回 「博物館で食文化を考える――みんぱく展示場をフィールドに見立てて」【世界の食文化を学ぶ⑥】
2016年２月６日　　講師　池谷和信　　参加人数　39名
「調理をする」「食糧を分かち合う」ことに、人類文化としての共通性を見出し、展示場をフィールドに見立てて、各地域の食文化の在り方と食文化研究の動向を展望した。

第452回 「祖先とともに住まう家――インドネシア、スンバ島で家屋を建てる」
2016年３月５日　　講師　佐藤浩司　　参加人数　35名
スンバ島の家屋を事例に、建築構造や空間構成、家屋にまつわる慣習等に着目し、「家」のもつ文化的な意味について考えた。

◎東京：モンベル渋谷店５Ｆサロン
第111回 「『氷の島』に生きる人びと――グリーンランド・イヌイットの文化と歴史」
2015年４月11日　　講師　岸上伸啓　　参加人数　42名
展覧会「スピリチュアル グリーンランド」の開催に併せ、グリーンランド・イヌイットの歴史・文化背景を知ると同時に、環境問題やグローバル化との関係について考えた。

◎東京：モンベル渋谷店５Ｆサロン
第112回「インナータライにネパール近代化の縮図をみる――チトワン国立公園の開発を例に」
2015年６月14日　　講師　南 真木人　　参加人数　31名
1951年の「開国」とマラリア撲滅運動を機に、人口が流入したインナータライに着目し、ネパール近代化における社会変化の一端をさぐった。

◎東京：JICA 地球ひろばセミナールーム600
第113回「食の歳時記――ベトナム、黒タイの村から」
2015年８月23日　　講師　樫永真佐夫　　参加人数　30名
ベトナムの少数民族・黒タイの食を歳時記風に紹介し、食をとおして習慣や信仰、近隣諸民族との関わりについて考えた。

◎東京：JICA 地球ひろばセミナールーム600
第114回「チョコレートの文化誌――カカオと人の4000年の物語」
2015年10月10日　　講師　八杉佳穂　　参加人数　43名
スペイン征服以前、薬効や貨幣的価値をもち、交易や貢納の品として珍重されたカカオに着目し、カカオと人の4000年に渡る関係を概観した。

●みんぱく見学会（協力：国立民族学博物館）
第58回　展覧会「スピリチュアル グリーンランド」（会場：代官山ヒルサイドフォーラム）
2015年４月11日　　講師　岸上伸啓　　参加人数　30名

第59回　新南アジア展示
2015年５月２日　　講師　三尾 稔　　参加人数　46名

第60回　企画展「岩に刻まれた古代美術――アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリャン」
2015年６月６日　　講師　佐々木史郎　　参加人数　51名

第61回　新東南アジア展示
2016年１月９日　　講師　信田敏宏　　参加人数　43名

第62回　本館展示（オセアニア～アフリカ展示場内の食文化展示）
2016年２月６日　　講師　池谷和信　　参加人数　39名

●体験セミナー（協力：国立民族学博物館）
第70回　「日本の食文化――昆布に親しむ」【シリーズ「世界の食文化を学ぶ（体験編）」①】
実 施 日　2015年６月25日［大阪府］
講　　師　土居純一（「こんぶ土居」４代目）、飯田 卓
参加者数　37名
食と食を下支えする生業の両面から「昆布を食す（出汁利用する）文化」を考えた。

第71回　「九州のなかの朝鮮文化を歩く――菓子、工芸、史跡にさぐる関係史」
【シリーズ「世界の食文化を学ぶ（体験編）」②】
実 施 日　2015年12月２日～３日［２日間・佐賀県］
講　　師　村岡安廣（村岡総本舗社長）、朝倉敏夫
参加者数　31名
朝鮮半島に縁のある焼物や染織、飲食文化をとおして、日本と朝鮮半島の相互関係について考えた。

●民族学研修の旅（協力：国立民族学博物館）
第86回「チョコレートのふるさとを訪ねて――カカオと人の4000年をメキシコにさぐる」
実施期間　2016年２月13日～22日（10日間・メキシコ）
講　　師　八杉佳穂（民博名誉教授）
参加者数　24名
古代メソアメリカにおいて、薬効や貨幣的価値をもち、高貴な人びとに珍重されたカカオは、味や姿を変えながら現在もメソアメリカの人びとに親しまれている。カカオに縁ある遺跡や農園、宗教施設を巡り、メソアメリカの歴史的・民族文化的背景をさぐった。

●午餐会（協力：国立民族学博物館）
第200回「イスラーム国の来歴と中東の未来」
2015年７月17日（金）　　参加人数　23名
講　師　池内 恵（東京大学准教授）　コメンテーター　須藤健一（館長）
イスラーム国が生まれた背景を、宗教や歴史、社会背景から捉えなおし、中東世界の今後を展望した。

●『季刊民族学』（国立民族学博物館友の会　機関誌）
協力：国立民族学博物館
編集・発行：千里文化財団
152号：特集「西欧社会の多様性」ほか（2015年４月25日発行）
153号：「楽器学の再創造」ほか（2015年７月25日発行）
154号：特集「泉靖一が歩いた道」ほか（2015年10月25日発行）
155号：特集「カレー料理とインド研究交友録」ほか（2016年２月25日発行）

●みんぱくに集積された資料と情報を活用した出前授業プログラム

実施日	実施場所	プログラム内容	参加人数
2016年１月20日	長岡京市立長岡第六小学校（放課後教室）	風呂敷	３名
2016年３月３日	豊中市立南丘小学校	風呂敷	32名

●巡回展「イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる」の開催
会期：2015年６月27日～８月23日（50日間）
会場：郡山市立美術館企画展示室
主催：郡山市立美術館、国立民族学博物館、千里文化財団
企画：国立民族学博物館　国立新美術館　日本文化人類学会
助成：日本万国博覧会記念基金（公益財団法人　関西・大阪21世紀協会）
入場者数：8,447人
＜関連企画＞
１）講演会「光と色が放つイメージ」
　日時：2015年７月４日
　講師：上羽陽子
　会場：郡山市立美術館多目的スタジオ
　参加人数：62名
２）講演会「イメージの力――みんぱくコレクションが語るもの」
　日時：2015年８月８日
　講師：吉田憲司
　会場：郡山市立美術館多目的スタジオ
　参加人数：78名
３）ギャラリー・トーク
　日時：2015年８月22日
　講師：永山多貴子（郡山市立美術館主任学芸員）
　会場：郡山市立美術館企画展示室

参加人数：25名

4）ワークショップ「野外彫刻を作ろう」
日時：2015年７月18日
講師：関根秀樹（和光大学講師・民族文化史研究家）
会場：郡山市立美術館多目的スタジオ
参加人数：20名

5）ワークショップ「民族楽器とサウンドオブジェを作ろう」
日時：2015年８月９日
講師：関根秀樹（和光大学講師・民族文化史研究家）
会場：郡山市立美術館多目的スタジオ
参加人数：20名

6）映画会　特集：映画で楽しむ「イメージの力」
会場：郡山市立美術館多目的スタジオ
① 上映作品「キリクと魔女」
日時：2015年６月28日　　参加人数：32名
② 上映作品「アフリカ物語」
日時：2015年８月16日　　参加人数：51名

●カレッジシアター「地球探究紀行」の開催協力
会場：あべのハルカス近鉄本店ウイング館９階「スペース９」
主催：産経新聞社、 共催：近鉄文化サロン、スペース９
特別協力：国立民族学博物館、千里文化財団

2015年４月15日　「南アジア、大躍動。その『からくり』と、これから」
講師：三尾 稔　　参加人数：34名
2015年４月22日　「異種混淆の世界・東南アジア――インド文明と中国文明のはざまで」
講師：信田敏宏　　参加人数：37名
2015年５月13日　「星と風と波と――オセアニアの偉大な航海者」
講師：須藤健一　　参加人数：43名
2015年５月27日　「アムール河の古代岩画と神話――少数民族の聖地シカチ・アリャン」
講師：佐々木史郎　　参加人数：43名
2015年６月10日　「商人と布の移動からみる西アフリカ経済の変遷」
講師：三島禎子　　参加人数：26名
2015年６月24日　「漆をつかう――漆工技術の継承」
講師：日髙真吾　　参加人数：31名
2015年７月８日　「チョコレートの故郷――メキシコと中央アメリカ」
講師：鈴木 紀　　参加人数：40名
2015年７月22日　「武器をアートに――アフリカ・モザンビークにおける平和構築の営み」
講師：吉田憲司　　参加人数：29名
2015年８月26日　「タイ・ラオスの仏教寺院――その伝統と文化」
講師：平井京之介　　参加人数：42名
2015年９月２日　「政府をフィールドワークする!?――明治以来の110年ぶりの大改革と日本の官僚文化」
講師：出口正之　　参加人数：43名
2015年９月16日　「『聴き語り』の芸能――平家物語、瞽女（ごぜ）唄からブルースまで」
講師：廣瀬浩二郎　　参加人数：63名
2015年９月30日　「台湾のイノシシ猟――日本のイノシシ猟と比較しながら」
講師：野林厚志　　参加人数：34名
2015年10月14日　「太平洋の島へことばの調査に行く」
講師：菊澤律子　　参加人数：29名

2015年10月28日　「応援をめぐる旅――ニュージーランドのハカから日本の大学応援団まで」
講師：丹羽典生　参加人数：24名
2015年11月11日　「インド染織文化の今――村落から世界へ」
講師：上羽陽子　参加人数：24名
2015年11月25日　「みんぱくコレクションに見る世界のイスラーム」
講師：山中由里子　参加人数：28名
2015年12月９日　「カザフの食文化――草原の恵みと人生儀礼」
講師：藤本透子　参加人数：30名
2015年12月16日　「ユートピアの遺跡を訪ねて――ボリビア・パラグアイ・アルゼンチン」
講師：齋藤　晃　参加人数：33名
2016年１月13日　「インドの家族とそのかたち、いま・むかし」
講師：松尾瑞穂　参加人数：31名
2016年１月27日　「中国の世界遺産建築――円形土楼と囲龍屋」
講師：河合洋尚　参加人数：35名
2016年２月３日　「パキスタンの山奥でことばを調べる」
講師：吉岡　乾　参加人数：29名
2016年２月24日　「南太平洋のサンゴ島を掘る――女性考古学者の謎解き」
講師：印東道子　参加人数：32名
2016年３月９日　「中国鵜飼い探訪記――消えゆく前にみてみよう」
講師：卯田宗平　参加人数：34名
2016年３月23日　「ダンジリの系譜」
講師：笹原亮二　参加人数：31名

●その他、普及活動

① 国立民族学博物館オリジナルグッズの制作及び頒布
仮面をモチーフにしたＴシャツ、クッキー
あいさつ＆ありがとう　スタンプ（アイヌ）

② 国立民族学博物館活用術ちらしの制作及び周辺施設への設置